

『希望の倫理 自律とつながりを求めて』

岡野治子・奥田暁子編、知泉書館、2012年

おやさと研究所
天理ジェンダー・女性学研究室
金子 珠理 Juri Kaneko

本書が生まれた直接のきっかけは3.11である。執筆者たち(全員女性)は、3.11以前から研究会(フェミニスト倫理研究会)を持ってきたが、そこで主として議論されていたテーマは「いのち」の大切さと、経済がすべてに優先する生活への批判であった。大震災の後片付けもまったく進まず、福島避難民にまだなんの補償もされず、原発事故の収束もいつになるか分からない時期に、政財界のリーダーや電力会社によって経済優先の論理が語られ始めたことに強い違和感を覚えた執筆者たちの危機感が、本書には込められている。にもかかわらずタイトルに「希望」とあるのはなぜか、そして副題にある「自律」と「つながり」の関係はいかなるものか、編者の岡野治子は以下のように述べている。

「希望」は絶望的な状況の中で、想像力を羽ばたかせて、理想の世界ユートピアに向かう人間の貴重な「力・資源」であるゆえに、多くの宗教において重要な徳目・中核的価値となっている。「いま、ここで」社会の歪みを見つめ、それを超越する世界の構想に向けて希望の力が結集されるべきであり、その先の望ましい社会とは、「自律」と「つながり」の均衡がとれているような社会ではないかという。「自律」は人間に与えられている自由という現実であり、そこには消極的自由(～からの自由)のみならず積極的自由(～への自由)が不可欠となる。自分で選択すること、他者に盲目的に依存しないこと、集団・組織の良くない圧力に抗うこと、隣人・仲間・社会などへの貢献などがその実践的内容である。自律は、多様で異質な他者が共存する社会にあって、ゆったりとした「つながり」の中で、「自分らしい」あり方、自己実現という形で表されるものであるから、関係性としての「つながり」を必要条件としているという。ただしこの「つながり」は、3.11以後過剰に消費されている「絆」という語源的にも拘束力の強い関係性とはニュアンスを異にするものであろう。

執筆者たちは、このような共通理解の下、それぞれが長年関わってきた研究領域(哲学、神学、歴史、文学など)から、現代日本社会の歪みと不条理を問題化し、脱構築を試みる。

第I部「小さな声」からはじめる”では、社会構造上、声を挙げにくい立場にある女性たちの「小さな声」に耳を傾け、その痛み、苦しみに寄り添いながら、社会の構造上の不条理を析出し、解放の途を模索しようとする。河上睦子論文は、原発事故によって食環境が破壊された事実をミナマタに重ねながら、当事者(特に母親たち)が負うことになった苦しみの原点と内容を探る。それらがいずれもリプロダクティブ問題であることを指摘し、エコフェミニズムの実践の最先端を描き出す。支倉寿子論文では、フランスでの買春廃止主義の実際を描写、分析しながら「買春や風俗のない」日本社会が構想される。早川紀代論文は、日中戦争での性暴力の被害女性たちとの実際的交流を通して、性に関わる戦時の不条理な現実を伝える繊細な試みとなっている。

第II部“社会的排除から包摂に向けて”では、近年増加の傾向にある「発達障害」と診断される人々の抱える問題とホームレスの人々の問題に焦点があてられる。牧律論文は、発達障害

と認定されるケースの増加が社会の変化と連動しているのではないかという視点から、現代社会とそのような人々の抱える問題群を分析する。負担をもたらず人々を排除するのではなく、つながりのある関係性が根付き、異質な人々をゆったりと包摂する社会構築の可能性を探る。横山杉子論文は、ホームレスと縁のない生活をしてい

る人々に、この問題の実態の理解を促す。合法とはいえ、困窮者保護の責任を担うはずの公的機関による排除行為という不条理を前に、私たち一人ひとりの市民はどのような立ち位置にあり、どのような応答(責任)ができるのか、という重い問いが提示されている。

第III部“日本社会に生きるということ”において、まず山下暁子論文では、性差別や諸々の慣習にしばられ「生き難さ」を文学の中で巧みに表現しつつ、性差別や種々の差別を告発し、しなやかに乗り越えて行こうとする幾世代かにわたる女性作家のまなざしが扱われている。奥田暁子論文「新しい共同性へ—集団同調主義からの脱却」と岡野治子論文「伝統的倫理観と〈いのち〉のゆくえ」はともに、宗教(倫理)の視座から日本社会を問い直すものである。奥田は、3.11を通して、政府や大企業トップの無責任体質、真実を追求しない専門家やマスコミなど、依然として日本が集団同調主義であること、さらにそうした集団同調主義が生み出される要因が日本における宗教のあり方と無関係ではないことを指摘する。そしてそこから脱却するためには、個人の自立を尊重する新しい共同体が必要であると提案する。岡野は、3.11の危機を通して、自然災害がなぜ原発の事故につながったのかを問いつつ、最終的に日本社会で形成された倫理は、共同体中心主義であり、相互依存性であるために責任主体が曖昧であることを確認する。誰もが責任をとらない社会では様々な弱者が排除の対象とされうる。欧米のフェミニスト神学の構想を重ねながら、一つひとつの〈いのち〉に神聖さを認めてきた日本の伝統を活かし、障がい者、老いた人、弱い立場の人が不幸にならない社会の青写真を模索する。

執筆者の多くは1980年代半ばに発足した「フェミニズム・宗教・平和の会」に関わってきた方々である。この会をリードされていた編者のお一人でもある奥田暁子さんは、本書刊行の2カ月後に天国に旅立たれた。いかなる時にもぶれることのない慧眼を備えた奥田さんから学んだことは数知れない。この場を借りてご冥福をお祈りしたい。

